わたしも博物館人

博物館こそはしかけ

滋賀オサムシ研究会会長・滋賀虫の会会員　武田　滋

私とオサムシとの関わりは25年以上もさかのぼります。当時は大阪の金剛山のドウキョウオサムシや長崎の対馬のツシマカブリモドキなど、どちらかと言えば人気の高いオサムシを他の虫を採る合間をぬって採集していました。特に、オサムシをねらって採集に出ることは全くありませんでした。

それが、琵琶湖博物館ができ、分類研究室に八尋君が来られ、1996年にオサムシ研究会ができてからは、一年中オサムシ調査の日が始まりました。春から夏はトラップを仕掛けに、秋から冬にかけてはオサムシ掘りと西に東に飛び回る日々が続きました。

その5年間の滋賀オサムシ研究会の成果は冊子「滋賀県のオサムシの分布」で集約され、その調査プロットの多さは都道府県単位として比類ないものと自負しています。今夏この成果は琵琶湖博物館で展示されます。

この調査を通じて、関東のオサムシ研究者など多くの人々と新たな出会いがあり、琵琶湖博物館に集まり、交流が始まりました。自分の世界が広がったことに感謝。

自宅の裏もフィールドです。

どこでも博物館

環境再生の目標と地域文化

主任学芸員（地域社会学）
牧野 厚史

今日の琵琶湖では、環境の保全だけでなく再生の必要性が提案されています。湖岸のヨシ帯を増やす、生物が棲めるように川や水路を作り直すなどですが、干拓された内湖（陸側の小さな湖）を再び湖に戻すという提案もあります。地域の環境のことなので、まずは地元の人たちが目標（望ましい環境）を検討します。物質的な自然環境の修復を話し合うわけです。その場合、実際の地元の活動をみると、人々の判断にはその地域の文化が深く関わっていることに気づきます。

滋賀県びわ町の早崎干拓地（写真）では、様々な専門家の応援を受けて、干拓地を再び湖に戻す実験が県によって行われています。その一方で、計画を検討する地元の人たちは、内湖を利用していた当時の様子を思い出しながら、自分たちの経験をまとめる活動をしています。

このように、自分たちの経験を参照しながら再生の目標を考えていく点に、住民からみた環境再生の特色がありそうです。コミュニケーションを通してまとめられる経験とは、その地域固有の文化といいかえてもよいでしょう。

環境再生の目標は、もちろん、文化というかたちのないものではなく、物質的な自然環境の修復です。ただ、そこに住む人々にとって、再生の対象は身近な地域の環境です。したがって、人々がそれらと長期的につきあっていくためには、地域文化という地域固有の発想も必要になってくるように思われます。

交流ノート

こんにちは！ 展示交流員です。

私たちは、琵琶湖博物館の案内だけでなく、展示を通してみなさんと交流し、みなさんに身近な自然や生活へ目を向けていただく『かけはし』となっています。どうぞお気軽にお声をかけてください。

A展示室の奥にあるコレクションギャラリー。ここではたくさんの化石や鉱物を見ることができますが、ほかにもいくつかの見どころがあります。今日はかくれた見どころを展示交流員さんに案内してもらいます。

▶ここでは本物の化石や岩石にさわることもできるのですか？

▶「自然史キットライブラリー」という化石や岩石を手にとってさわれるキットを用意しています。その中には「磨けばあんたも宝石よ」と名付けられたキットもあります。このキットには本物のダイヤモンドも含まれていて、ご覧になる来館者の目も輝いていますね。

自然キットライブラリー

こんにゃく石、曲がるかな？

▶「こんにゃく石」というのは何でしょうか？

▶それは「イタコルマイト」のことです。この岩石はブラジルで採取されたのですが、石を作っている鉱物の並び方が一方向へ整列しているので、ゆるやかに曲げることができるのです。ぜひためしてみて欲しいですね。

▶日本にもマンモスがいたのですね。

▶9月4日までの期間限定で「マンモスゾウ化石と世界のゾウ化石」をトピック展示しています。日本で発見されたマンモスの化石やマンモスの体毛もご覧になっていただけます。

マンモスゾウ化石